

2004年 インド・ダラムサラ・アイキャンプを終えて

柏瀬光寿

「地震の影響は？」 「TSUNAMIにさらわれなかった？」

2004年12月26日にスマトラ島沖で発生した地震とTSUNAMIがどれほどの大惨事だったか、そして、親戚や友人さらには患者さんにまで、とても多くの方々に心配をお掛けしていたことを、日本に帰ってきて知った。亡くなった方々を思うと、とても心が痛み、そして決して忘れられないインド滞在となった。一方で、今回で5回目となったインド・ダラムサラでのアイキャンプは、今までの積み重ねの成果を実感し、また、新たなる希望が垣間見られた、実りあるものだったと思う。

まずはDelek hospital 眼科部門最高責任者Tenzin Lungrickの成長に、目を張るものがあった。彼の仕事振りについては既にお墨付きだが、今年はさらにパワーアップしていた。薬品やカルテ、外来患者さん用の番号札、手術備品などの準備から看護婦の割り振りまで、文句のつけようがなく、またアイキャンプ前・最中を含めて一切、指示を必要としなかった。お陰で我々Japanese teamは医療に専念でき、外来・手術も順調にこなせ、さらには毎晩、温かく美味しい夕食にもありつく事ができた。Indian chemical beerも旨かった。彼の日常診療での活躍については想像の域を超えないが、間違いなくその責務を全うしていると思われた。それは、彼から聞く話やTenzinに対するDr. Tsetan (Delek hospitalの院長)の態度、患者さんへの説明の仕方(チベット語やヒンズー語のため、詳しいことは分からないが)やその振舞い、そして何より患者さんが彼に投げかける視線が全てを物語っていた。「見えづらいとの訴えで患者さんが来院し、検査をしたが眼球に明らかな異常はみられなかった。そこで対面視野法を行ったところ半盲が疑われたので、Sonar Hospital (Dr.Puriが勤務するGovernment hospital)に送ったところ、脳出血が見つかった」とか、「ヘルペス性角膜潰瘍が疑われた患者さんにゾビラックス眼軟膏を処方したところ、潰瘍は完璧に治癒し、患者さんにとっても感謝された」など、とても嬉しそうに話していた。また、今まではTenzinのことを信頼しきれていなかったDr. Tsetanの言動を見ても、如何にTenzinが着実に、そして確実に仕事をこなしてきているのか、想像し難くはない。患者さんへの説明では、それを聴く患者さんの表情から「信頼」というものが感じられ、実力を加味した人間としての素晴らしさも垣間見られた。Tenzinが今後どこまで成長するのか、とても楽しみだ。

今回のアイキャンプでは二人のニュー・フェイスが登場した。一人は日本から参加した新星、足羽先生、そしてもう一人は、インドからの輝ける星、Dr. Sharmaだった。Dr. SharmaはDr. Puriと同じ病院に勤務する眼科医で、Delek hospitalの院長Dr. Tsetanが絶大なる信用を置いていた人物だ。彼には以前に一度、会った事はあるが、会話をする機会がなかったため、なぜDr. Tsetanがそれほどまでに彼を信頼するのか私には分からなかった。しかし、彼の言動から、その意味を知ることができた。彼は、所謂“Gentleman”である。

眼科における知識や技量については、一緒に過ごした時間が少ないため、よくは分からないが、人となりについては申し分ない。特に、インド人 Dr.全般に見られる「驕り」や「高ぶり」は全く感じられず、患者さんに対する高圧的な態度もみられなかった。また、我々から多くを吸収しようという姿勢も、好印象だった。今後、Dr.Puri と彼の協力が得られれば、かなり心強い味方になる、と思われた。

今回のメンバーは、籠谷先生、岡田先生、川邨さん、小川君、私に加え、新星、足羽先生だった。籠谷先生や川邨さんの仕事振りや人間性にはいつも頭が下がり、どんな状況でも変わらぬ冷静沈着さは、我々、若輩者たちを安心させ、そしてチームを一つの方向に導いてくださった。一方、滋賀医大コンビ、岡田&足羽先生は恋人のようにいつも寄り添い、その阿吽の呼吸で楽しい雰囲気を作ってくれた。二人の会話は時として「どちらが先輩？どちらが後輩？」と考えさせられ、上下関係を超えた会話が我々を大いに楽しませてくれた。また、今回のメンバーの中で特に輝いていたのが、通訳、小川康であった。彼は、私がダラムサラ在住時の最高(?)の飲み友達、野球友達、話し相手だった。彼のチベット語はパーフェクト、英語はオーツオーツ(チベット語で“まあまあ”)、ヒンディーはからっきし、そして行動力はピカイチ!である。通訳としての働きっぷりはもちろんのこと、ガイドとしても最高のパフォーマンスを見せてくれた。ダラムサラはもとより、デリーやデラドゥーンを知り尽くし、食堂に宿にタクシーのブッキングに、そして観光案内に、東奔西走してくれた。また、彼の声掛けにより、Men-tsee khang(チベット伝統医学・星占術学校)の生徒が今年もアイキャンプの見学に来た。初めて間近で観る西洋医学の外来や手術に彼らの視線は釘付けとなり、手術をしながらもその熱い眼差しがひしひしと感じられた。小川君の存在が、チベット医学と西洋医学の“愛のキューピット”なるぬ“医学の架け橋”の役割を果たしている、と言っても過言ではない。また、このアイキャンプが Delek hospital と Men-tsee khang の医療の交流のきっかけになってくれれば、と切に思う。

アイキャンプ後に視察に行ったデラドゥーンだが、今まで私が知りうるチベット居住地とは一味もふた味も違っていた。通訳、小川氏による前情報によると、「かの地は、チベットから亡命してきた第一陣のうち、大成功を収めた人達が住んでいる処」、とのことであったが、実際に足を踏み入れてみて彼の説明が決してオーバーでないことが分かった。庭付きの一戸建ての家、綺麗な学生服を纏った子供たち、そしてそこに住むチベット人の佇まい、「これが世界から可哀相な難民と言われ、多額の寄付を受けている民族か!？」と、愕然とした。また、チベット仏教のアミューズメント・パークを髣髴させる大・大・大仏塔、ミンドリン寺。スポンサーは台湾人、設計は日本が誇る中原さんであり、豪華絢爛たるその建物は、あのインドの地で異色の雰囲気を放っていた。高さは優に 30m は超え、天辺から伸びるタルチョの長さは約 50m、周囲は緑の青々とした芝生に囲まれ、近くには U 時型をした(丸い建物を好む中原さんらしい)お土産屋さんが並んでいた。そしてそこには、観光客と思われる多くのインド人が集っていた。私が知りうるチベット人居住地とは、まるで別世界であった。また、Dr.Tsetan の紹介により宿泊した大そう立派な図書館も、診療

所の入り口を塞ぐように駐車していた日本の検診車と遜色ないほど立派な往診（検診？）バスも、どれもが台湾人のサポートによるものだった。当地に住むチベット人は間違いなく自立しており、今まで血の滲むほどの苦勞をしてきたとは思いますが、何故、この地だけこれほど裕福で他があればほど貧しいのか、何故、そのことに対して彼らは何とも思わないのか、何も手を差し伸べないのか（これは私感です）、不思議で不思議でたまらなかった。また、スポンサー制度に大いに疑問を抱かせる“樂園”であった。

先日、いつものように酔っ払って Tenzin に電話をした。Japanese 英語、Japanese チベット語に長けた私と、Tibetan 英語、Tibetan チベット語に堪能な彼との会話は、他の人が聞いたら「これで会話が成り立っているのか?!」と驚かれるほどである（実際に小川氏にそう指摘された）。他愛無い会話の後、本題に入った。「ところでアイキャンプで手術を受けた患者さんの状態はどう？」返ってきた答えはこうだった“**PERFECT !**”電話の向こうで笑っている Tenzin Lungrick の笑顔が思い浮かんだ。

今回まで 5 年間、そして私のダラムサラ滞在 1 年間、このアイキャンプを立ち上げ、そして苦勞しながらもサポートして下さった、上田さんを始めとする波百流の方々、本当にありがとうございました。心よりお礼を申し上げます。そして AOCA の皆様、今後ともよろしくお願いします。今回のアイキャンプは、これからの将来に希望を抱かせるものになったと思います。皆様、ありがとうございました。

最後に、スマトラ島沖地震で亡くなられた方々のご冥福をお祈りします。合掌。

12 月 27 日付け、新聞記事（日本語訳）

日本からのチームによる無料アイキャンプが、ダラムサラのロータリークラブの協力の下、デレック病院で行われた。白内障手術が、無料で日本の熟練した医師によって執刀された。日曜日には 26 名の手術が行われ、今日（月曜日）は 27 名の予定である。日本のチームは、デレック病院のスタッフやロータリークラブ、ダラムサラの政府医学大学の Dr. ラマン・プーリーの協力を得ている。